

## 石原吉郎のナルシシズム

—詩の源泉について—

小濱聖子\*

### はじめに

詩の創作とはどのように行われるのか。本稿でとりあげる石原吉郎（一九一五—七七）は、戦後八年間のシベリア抑留を経、一九五三年、三十八歳で日本に帰還した。詩人としての活動はその翌年、文芸投稿誌上での詩の発表からはじまる。そして死から僅か二年後には、鶴見俊輔に「戦後日本の最も注目すべき詩人の一人」と言わしめた<sup>(1)</sup>。この鶴見の評価は、他の多くのように石原を「シベリア帰り」として語るものの一つであるが、彼の作品を論じるには、実際そのシベリア経験を無視できない<sup>(2)</sup>。

石原の第一詩集『サンチヨ・パンサの帰郷』の刊行は一九六三年であり、引揚からおよそ十年も経っているが、抑留体験について書かれた有名な評論集『望郷と海』等の刊行は、更に一九七〇年以降のことである。石原いわく、帰国直後は混乱状態で日常のことば（散文）をもって人に語ることが難しく、詩のみが書けたのだという（『望郷と海』について<sup>(3)</sup>）。散文である評論作品の遅れは、それが理由となっている。

石原の代表作の一つに、一九六一年に発表された「位置」という詩がある。

#### 位置

しずかな肩には／声だけがならぶのではない／声よりも近く／敵がならぶのだ／勇敢な男たちが目指す位置は／その右でも おそらく／そのひだりでもない／無防備の空がついに撓み／正午の弓となる位置で／君は呼吸し／かつ挨拶せよ／君の位置からの それ／最もすぐれた姿勢である

この詩について、同じ抑留経験者でありロシア文学者である内村剛介は「『のである』の『のだ』でもない」と押しつけて、「せよ」を挿み「君の位置からの それ／最もすぐれた姿勢である」で閉じられるこの一篇はいわば揺れに揺れてついに位置の定まらぬ者がみずからにろうじて「である」といわしめる<sup>(4)</sup>と述べる。こうした切迫感あふれる詩に石原を駆り立てたものは何であるのか。彼は散文を書き出すまでの約十五年間を「外的な体験の内的な問い直しと、問い直す主体ともいえるものを確立するための、いわば試行錯誤のくりかえし」<sup>(5)</sup>、「まったくあたらしく私にはじまって行

く過程」（『望郷と海』について）だったという。詩とは異なり、内的反省の思考を人に語るには、それに見合った論理的展開を示せる散文の形式が相応しいとも言える。だが、その論理的思考の前に、既に書き始められていた詩とは何なのか。

作品において、内容と形式とは不可分である。詩と散文とは、それぞれ非日常と日常のことばの形式として全く別の様相をとる。一方で、それらが一人の作者によって統一され得るといいうのもまた事実である。石原の作品はシベリアでの体験を原型としており、彼の詩の発祥がそれであることには間違いない。彼の作品の読み手は、しばしば彼の「決定的な体験の落差」を感じ、そこで思考を停止させてしまうが、これは対象の単なる敬遠にもなりかねない。読み手のなすべきは、石原がその体験を詩という形で書かざるを得なくなつた地点をさぐることであろう。彼の作品は、ことばを介す共生という人間共通の問題へと向き合うことを読み手に要求する。本稿ではその問題意識をもとに、石原吉郎の詩の創作の源泉にはたらいっていたものを、彼の内的な問い直しの過程だという散文作品を中心に考察し明らかにする。

第一節では、石原の詩への衝迫について、その外的な契機を考察する。シベリア抑留という出来事は、まずことばの問題となつて彼の帰国後の社会復帰を妨げた。自分を受け容れてくれている人々の集団があるはず、という期待を抱いて帰国した石原は、早くも日常会話ということばの次元でその期待を裏切られ、他者との交流に挫折感を味わつた。詩の契機としての、この他者への挫折感について、まず取り上げる。第二節では、前節で述べた他者との関係という、いわば外的契機から転じて、内的な人間関係、すなわち自分にとつての私という関係に目を向ける。石原は、自己を含めて人間を墮落した（もしくははし得る）存在として否定的に見る。そのことは、彼があらゆる人間の関係を絶望的な不信のもとにみていることと関係している。

石原のいう人間の墮落とは何か。第三節では、それが特に失語という状態とかか

〔キーワード〕 石原吉郎／詩／ナルシシズム／（非）日常言語／シベリア抑留

\*平成一六年度生 国際日本学専攻

わっていることを明らかにする。収容所では一部の命令等を除き、およそ人間らしいことばを介する共生はなく、安らぎはただ他の人々から離れて独り何も考えずにいる時のみとなる。不信の徹底によるこの失語的な状態を、石原は人として危険な状態だったという。だが、そこから回復しなければならぬことも述べている。そして彼自身がそこから回復し、ことばを取り戻した契機に、人の死という出来事があった。

第四節では人の死と自己愛について、すなわちナルシズムの問題について論じる。石原の詩への衝迫は、他の人々に自分を受け容れることを要求する一方的な期待からはじまった。その他者への絶望や自分自身への不信を経た後、彼は孤立的で一種自己愛的な在り方を求める一方、他者の死に衝撃を受けたことを思い出し、なおそれらと関わろうとする志向も持っていたと考えられる。それらの葛藤が彼の詩の創作の源にはあったのではないか、またそうした葛藤は彼に限らず誰もが抱き得るものなのではないか、ということを経論として示したい。

### 第一節 他者へ—ことばの挫折—

詩という形式をえらんだ動機を、石原はある所で次のように述べている。

日本に帰って来た直後は、たくさんのものが自分の内部にうっ積して、凝縮した状態にあったわけです。それを散文的な形、あるいは日常のことばの次元でとぎ放つことができなかつたわけですね。それは、実際に人に話してみてもわかつたことですが、殆ど理解してもらえない。ということが、別の切迫したことばの次元、詩という形式を選ばせたということに、強いて説明すればなるかもしれない。それと、シベリヤでの八年間は殆どロシア語だけの中にいて、そういう時には日本語というものが非常に不つかしいわけですね。それで帰ってきた時、日本語そのものが私にとって非常に新鮮だったということが、私を詩におもむかせた一つの動機になつていないかと思ひます。(沈黙するための言葉)

この引用文から分かるのは、石原において、第一にことばが「日常」の次元と「切迫した」次元との、二つの次元に分けて捉えられていることである。第二に、日本語という母語の追体験があったということである。

第一に、ことばの次元で問題となつて居るのは、他者との理解の(不)可能性である。帰国直後、おそらく最も彼が周囲の人に心情的な理解を求めたであろう時期に、それを日常のことばで即座に語ることができなかつたことは、自らの話し手としての

言語能力に対する疑惑や焦燥感を抱かせ、同時にまた、自らのことばを理解しなかつた他者への不信にもなつたと考えられる。更に第二の点として、共通の母語を持つ者同士の間で、その母語すらもお互いをつなぐ役を殆ど果たさなかつたという意味は非常に重い。あることばはそれを母語とする人間にしか本当に理解できない、といったことを、石原は「それぞれの国のことばが本来もつている宿命のようなもの」(「沈黙するための言葉」)と捉えるが、「日本人の中でお互いに話している日本語が、同じ平面でまじわつて居るかどうか、大変疑問」(同)とも述べている。ことばを介する人間関係への不信は、当のことばを使わずにいられない詩人である石原の思想(この「思想」も言語化したものを扱うわけだが)の基底をなしている。

だが今はまず引用中の「日本に帰って来た直後は、たくさんのものが自分の内部にうっ積して、凝縮した状態にあった」という一文に注目したい。当時の状況については、石原が親族に宛てた書簡「肉親へあてた手紙」<sup>6)</sup>が手がかりになる。帰国後の彼に対して、周囲の地縁・血縁関係者は「けじめ」(同)を要求した。彼らは石原に、思想上の詰問を行い、もし共産主義者ならば交流不可能であると宣告したという。また両親を既に亡くしていた石原に、物質的支援を除く精神的後見人になつてやつてもよいと恩義を着せるような圧力的態度を示し、祖先供養の引継ぎも強要したという。彼はそのような相手に対して「道義上の責任」(同)を問い返す。

このような生活(収容所での生活—引用者注)の中で、とも角も私のささえになつたのは、私は決して(犯罪者)ではないということ、いずれは誰かが背負わされる順番になつていた(戦争の責任)をととも角も自分が背負つたのだという意識でした。そしてまた、このことだけはかならず日本人たちに理解してもらえろという一種の安心感でした。(…) / しかし(…) 次第にはつきりしてきたことは、私たちが果したと思つて居る(責任)とか(義務)とかを認めるような人は誰もいないということでした。(…) 浅薄な関心さえもまたたくまに消え去つて行き、私たちはもう完全に忘れ去られ、無視されて行つたのです。 / ところが、完全に忘れ去られたと思つて居た私たちを、世間は実は決して忘れてはいなかつた(…) ほとんどの人が(シベリヤ帰り)というただ一つの条件で、いつせいにあらゆる職場からしめ出されはじめたのです。(肉親へあてた手紙)

故郷である日本や日本人への期待によつて、最も苛酷な抑留期を乗り越えた石原は、しかし帰国後にその期待を世間からも、親族という親密な集団からも裏切られた。帰国後の一連の出来事について、石原は絶望したと書く。勿論当時の社会的な状況を

考えれば、彼に限らず戦争から帰還した者で類似の経験をした者は多い。だがまた、それを仕方のないこととして無批判的に承認することは、隠蔽することに等しい。

石原は先の引用において、旧ソ連の国内法によって裁かれたことについては「私は決して『犯罪者』ではない」と述べる。だがその一方で「いずれは誰かが背負わされる順番になっていた『戦争の責任』をとる角も自分が背負ったのだ」という意識についても述べており、彼が戦争犯罪とその罪責意識を持つていたことは明らかである。罪責意識とは既述のことばで言えば「内的な問い直し」、つまり自己内の権威的な力による自己の審議である。丸山眞男の「無責任の体系」論を援用するなら、戦争責任を常に自分より上位者にあると考えて自らは責任を逃れようとした人々は、その無責任さにおいて戦中も団結したように、戦後も継続して団結したといえる。ここでは、個人の責任や義務を持ち込もうとする者（この場合は石原）は排除や圧力をかけられる。他者にその責任を問いかけることなどせずとも、内的な反省という極めて個人的な振る舞いだけで、十分に共同体から締め出される理由になり得るのである。

石原の日本帰国後の出世作「夜の招待」を、『文章倶楽部』で特選に選んだ谷川俊太郎は、のちに石原の帰国後の肉親との相克について触れ、彼について「自閉症的に自分を閉じた」<sup>(7)</sup>所があると述べている。この「閉じた」自分とは、日常のことばで人に理解されたいという欲望が挫折し、内側へ向った状態に他ならない。そして思い通りにならない他者と対面した際に起きた自己愛的憤怒は、その攻撃欲求を対面相手に向けることに挫折し、対象を自己へと回折した後、最終的には詩の創作衝動にその姿を変えて現われたと考えられる。だが先ずは、その自己への回折を見ていこう。

## 第二節 自己へ―不信の関係―

石原が最も根源的な問題としていたことは、人間関係の問題であり、それはすなわち人間への不信と孤独にいたのであった。

なによりも私は、墳墓と儀式、および排他的な血族意識によって人間がつながりあい、かわりあうということに強い不安と危機を感じないわけには行きません。(…)このような結びつきの内部でもっとも重要なことからは「誰を誰の上に置くか」という格式の問題であり、「誰と誰が組んで誰に当るか」という党派意識の問題であり、「誰が誰に与えたか」という恩義の量の問題です。おおよそ、人間の存否にかかわることがらは、ここでは永久に押しつけられるか、あるいは

はまた自己の立場を巧妙に守るための論理的武装に利用されるだけであり、しかもこのような結びつきの底を流れるものは、暗い怨恨と誤解との、腐食的な進行だけではいかぬかとすら考えます。／もともと外部部に向って結束する目的を持つだけの血族的な結びつきが、むしろ内部から逆に分裂していくのは、このようなきわめて感性的な、あるいは生理的な原則を中核としたことから起るものであると考えます。(…)／私は、人間はどんな場合でも、人間としてのみかかわりありうべきものだと考えます。そのばあい私たちを結びつける真実の紐帯となるものは、その相互間の安易な直接的な理解ではなく、それぞれの深い孤独をおたがいに尊重しあうことであると考えます。そのような場合にのみ、私たちは人間として全く切りはなされた状態でありながら、しかもその全体の上に深い連帯が存在しうると考えることができます。(「肉親へあてた手紙」、傍点原文)

帰国後の出来事は石原の人間不信を強め、日本語ということばに彼を向かわせたきっかけになったが、彼の人間不信そのものは既にシベリアにいた頃からあった。引用文には、問題の本質が単なる血族関係ではなく、外部・内部という集団のあり方そのものにあることが示されている。集団は内対外という対立を成立基盤の姿勢としている限り、腐食し崩壊することを免れない。このような人間の「連帯」の難しさに直面する度、信頼は不信へと転じ、石原に絶望を語らせるとともにますます自己の内面へと向わせることになる。そしてそれは、宗教的な救済の次元にまで深められる。

絶望しやすい人間と、容易に絶望しない人間があるというのはどういうことか。僕は、自己への関心の強さが、その人間の絶望への勾配を決定するのだと思う。(…)人間はつねに人間以外のものであつてはならないが、しかし人間であるということとは、祝福と絶望の二重の構造のなかで考えられなければならないのだ。人間がそれ自身として人間であること、人間の絶望のもっとも深い根源はおそらくそこにあるのであろう。それは論理的にいつても、きわめて明らかな帰結であるように思われる。いいかえれば、絶望は人間のもっとも根源的な存在形式なのだ。(9・9) (一九五九年から一九六一年までのノート)<sup>(8)</sup>

重要なものは、石原の不信には自己の自己自身に対する不信も含まれるという点である。絶望は、それが絶望であるかぎり救済されねばならないが、自分自身への信頼の回復が果されない限り、救済への期待とその裏切りという循環から、人は抜け出せない。だが、彼が自分自身を含めた人間への不信と裏切りの体系を経験したのがシベリアならば、その人間存在についての思考が最も深められたのもまたシベリアであつ

た。

「すなわち最もよき人びとは帰っては来なかった」。〈夜と霧〉の冒頭へフランクがさし挿んだこの言葉を、かつて疼くような思いで読んだ。あるいは、こういうこともできるであろう。「最もよき私自身も帰っては来なかった」と。今なお私が異常なまでにシベリヤに執着する理由は、ただひとつそのことによる。私にとって人間と自由とは、ただシベリヤにしか存在しない（もつと正確には、シベリヤの強制収容所にしか存在しない）。日のあけくれがじかに、不条理である場所で、人間は初めて自由に未来を想いえがくことができるであろう。条件のなかで人間として立つのではなく、直接に人間としてうづくまる場所。それが私にとってのシベリヤの意味であり、そのような場所でじかに自分自身と肩をふれあつた記憶が、〈人間であつた〉という、私にとってかけがえのない出来事の内容である。「三つのがき」、傍点原文

石原にとって人間関係とは人間の自由の問題であり、その自由が未来を想いえがくという行為にかかっているというの、すなわち自由な個人同士は互いに共生の可能性を持ち得なければならぬと言ふに等しい。今日の未来は明日であり、朝を迎え夜になりまた翌朝を迎える、という日の明け暮れ自体は、不条理でもなんでもない事実である。不条理というのは、その事実を解釈する人間の問題だ。収容所内における囚人の生活は、起床時間から食事など殆ど全てのこと常時「条件」が課されている。その条件の一つ一つを数え上げ、他人と比較しながら更に自分を律することができていなければ人間ではない、というのは傲慢な者のいうことだろう。条件というのは、シベリアの強制収容所ではなくとも、誰の日常においても課されている。それが日の明け暮れという生活の根本的な部分にまで不条理なほど徹底的に行き渡っている場所でお、そのまま生きている者を人間と見なせるか、見なしてよいかという問いを、先の文は提示している。そして、人間と見なそうとしている相手は、他の誰よりも自分自身である。自分は果して人間かという問い、すなわち自己への関心は、石原にとって避けられないことだ。だがそれは喜ばしい形では行われない。

引用の「人間であつた」という過去形の文にも明らかなように、石原にとって「最もよき」人間としての彼自身はシベリアで失われたものとして捉えられている。先の文から見えてくるのは、収容所という「直接に人間としてうづくまる」場所において、人間はまずその最善の自分を失い、自身の人間性への疑いを徐々に深めていき、最終的にとにかく自分は人間（であるはず）だという無条件の承認にいきつかざるを得な

い、という論理である。この無条件の承認というのは、日本思想研究における「自覚」、すなわち主客未分の直感と反省的意識とを統一した人間存在という問題にも通じるが、今は措く。少なくとも、「自覚」が宗教的な安心の境地と関連して論じられることがあるのに対して、「絶望する能力をもつ」ということは、いかにしても救いえない人間の暗さを示す（一九五九年から一九六一年までのノート）という石原の「承認」は、安易に同一には論じられない。

彼が人間関係において「道義上の責任」を問う時、そこには他者に対する責任のみならず、自らの自らに対する責任が含まれている。収容所から生き残つたこと、死に損なつたこと、またその過程において、人間として後述のように「墮落」したこと、その責任である。過酷な時空間を生きのびるには環境への適応が不可欠だが、その適応が彼の目には人間の墮落と呼ぶべきものに映つた。

いわば人間でなくなることへのためらいから、さいごまで自由になることのできなかつた人たちが淘汰がはじまつたのである。／適応とは「生きのこる」ことである。それはまさに相対的な行為であつて、他者を凌いで生きる、他者の死を凌いで生きるということにはかならない。この、他者とはついに「凌ぐべきもの」であるという認識は、その後の環境でもういちど承認しなおされ、やがて〈回復期〉の混乱のなかで苦しい検証を受けることになるのである。（「強制された日常から」）

旧ソ連に抑留された日本人が、入ソ直後の一九四六年から四七年にかけて特に多く死亡した（石原の語では「淘汰された」という記録はしばしば見受けられる。右の引用は、その淘汰の時期における石原の実感を示している。文中に「その後の環境」とあるのは、二度目の淘汰の一九四九年から五〇年の時期を指し、つまり人間による人間の淘汰という出来事が一回限りの特殊な出来事ではなく、必然的に繰り返される出来事だということを示す。帰国後の石原は、抑留問題について、それがいかに政治的人道的に非道なものだつたとしても一切告発することを拒むという方針をとつた。その理由は次のように考えることができる。すなわち石原が収容所での生き死にを「淘汰」と呼び、淘汰されたのが「人間でなくなる」というためらいから、さいごまで自由になることのできなかつた人たちから」だつたというならば、最後まで生きのびた者は人間でないという解釈を導き出せるが、彼はそう明言するのを避けたということである。この解釈に従えば、収容所生活における非人間性の告発は、その場に生き（てい）た彼自身の非人間性、すなわち自分が人間ではなかつたということを確認

なければならなくなる。石原が、自分は人間であり続けたという承認を手放せないのならば、先の告発は断念しなければならぬ。結局、彼は自分が人間であり続けたという承認を事実として選んだが、そのために告発の矛先は外部ではなく自らの内側に向うことになった。それは、生存するための環境への適応を、人間ならばとるべき責任があるはずの墮落だとする捉え方となつてあらわれたのである。

墮落の第一は、私たちに對する非人間的な処遇、すなわち囚人たる地位への順応である。(…) 正常な状態ではとうてい受け入れようのない処遇を、当然のこととして私たちは受け入れるようになる。かつて人間であつたという記憶は、しだいにいぶかしいものになつて行くのである。(…) / 墮落の第二は、囚人のあいだでの救いようのない相互不信である。(…) / このような食事(囚人同士が食事を奪い合う食事—引用者注) がさいげんもなく続くにつれて、私たちは、人間とは最終的に一人の規模で、許しがたく生命を犯しあわざるをえないという、確信に近いものに到達する。(…) 食事によつて人間を墮落させる制度を、よしんば一方的に強制されたにせよ、その強制にさいげんもなく呼応したことは、あくまで支配される者の側の墮落である。(「強制された日常から」)

石原は「人間の墮落は、ただその精神にのみかかわる問題である。肉体は正確に反応し、適応するだけであつて、そのこと自体は墮落ではない」(「強制された日常から」)という。ひとは人間であるかないかという議論以前に、生物として生存していかなくてはならない。その条件は肉体的な範疇に属するものであり、肉体は主体の生命を全うすることのみを要求される。このことは石原が肉体を軽んじたのではなく、逆にその強靱さを信頼していたのだといえよう。相互不信という点にこそ、彼が人間の墮落と呼ぶ問題がある。次に、その墮落によつて人が陥る(失語)と、同時にそこからの回復が石原にはどのように果たされたかを考える。

### 第三節 失語から沈黙へ—ことばの奪回—

石原よりも長い抑留を経験した内村剛介は、次のようにいう。「ニンゲン。こいつあ何にでも狎れやがるチキシヨウだ!」と言つてのけるシベリヤの囚人たちはいつたい何を見、何を感じる修羅であつたか。(…) ニンゲンにおける失語の状態は抑圧下にあつてよほど人間の品位にふさわしい。/ この意味で石原の失語は石原という名の修羅にとつても春を意味しはしなかつたか。彼の失語の頂点が「抑留以後 帰国ま

で」を経てその直後に日本で現われたとすれば(わたしにはそのように思われる)、シベリヤよりもジャパンの方が人間のことばに、つまり人間に鈍だということになるだろう<sup>(9)</sup>。先述の谷川と同様、内村が石原の帰国直後の体験の重要性に言及していることは注目してよい。内村の文は、あらゆる自由を抑圧されている囚人だからこそことばにおける人間の品位と関わると言っている。しかしその関わり方は決して喜ばしいものではない。石原は収容所での日々を次のように回想する。

そのときの私にはすでに、持続すべきどのような意志もなかつた。一日が一日であることのほか、私は何も望まなかつた。一時間の労働のち十分だけ与えられる休憩のあいだ、ほとんど身うごきもせず、河のほとりへうづくまるのが私の習慣となつた。(…) / そのときの私を支配していたものは、ただ確固たる無関心であつた。(…) だがこの無関心、この無関心がいかにささやかでやさしく、あたたかな仕草ですべてをささえていたか。私にとつて、それはほとんど予想もしないことであつた。実際にはそれが、ある危険な徴候、存在の放棄の始まりであることに気づいたのは、ずつとのちになつてからである。私の生涯のすべては、その河のほとりで一時間ごとに十分ずつ、猿のようにすわりこんでいた私自身の姿に要約される。(…) 私はこの原点から、どんな未来も、結論も引き出すことを私に禁ずる。失語の果てに原点が存在したということ、それがすべてだからだ。(「沈黙と失語」)

失語というのは単に語が無いのではない。右の文に続けて、石原は失語を現実の生活において言葉が無力となることだと述べる。ことばに力が無いのは、力のある必要がないからである。ことばが人にとつて力あるものとしてはたらく場合、すなわちことばが使われるのは自分と相手との距離がある場合であつて、自他の境界が無い時にことばは不要となる。収容所の現実生活ではすべて均等であり、あらゆる条件やそれに対する「反応も発想も、行動すらもほとんどおなじであつた」(「沈黙と失語」)。そのように完全に現実が共有されている時、何かを語る目的、理由、必要のすべてがない。収容所における現実では、食事という生物として根本的な営みからして、均等さが共有される。石原が抑留一年目に入った収容所では、食器が不足していたため、囚人たちは二人一組となつて一つの飯盒に二人分の食事を入れて渡された。やがて囚人たちは缶詰の空き缶を二つ用意し、食べる際に飯盒から盛り分けて食べるという方法を考え出すのだが、その際分配される者は分配する者の一匙の動きも見逃さぬよう相手の手元を凝視し監視するのだという。目を離すとその際に相手は絶対に自分より

も多く食事を盛ろうと不正をするからである（「ある（共生）の経験から」）。絶対に、といえる理由は、自分が相手なら絶対にそうするという確信があるからだという。

ことばの不要な完全なるコミュニケーションというところ、まるで理想的な幸福であるかのように語られかねない。たとえば唯一絶対者との一体感における恍惚状態として述べられる、宗教的な神秘体験のような場合である。しかし石原の記述において、その理想の世界は、完全なる不信の果ての安定としてあらわれる。

私たちの間の共生は、こうしてさまざまな混乱や困惑をくり返ししながら、徐々に制度化されて行った。それは、人間を憎みながら、なおこれと強引にかかわって行こうとする意志の定着化の過程である。（…）たとえば、例の食事の分配を通じて、私たちをさいごまで支配したのは、人間に対する（自分自身を含めて）つよい不信感であって、ここでは、人間はすべて自分の生命に対する直接の脅威として立ちあらわれる。しかもこの不信感こそが、人間を共存させる強い紐帯である、ことを、私たちはじつに長い期間を経てまなびとったのである。（「ある（共生）の経験から」、傍点原文）

ここで不信感と並置されるものとして、無関心について考えねばならない。囚人たちは、労働および睡眠の時間には協力し、食事の時間には敵対する。それは不信感を抱きながらの共生の一形態である。しかしそれら生存の最低限の条件にかかわらない時間はお互い無関心に過ぐすという。この不信感と無関心について、芹沢俊介は「人間は自然に対し「不信感」をいだくことはできない。自然は受け入れ、格闘し、無化すべき対象であるかもしれないが、「不信感」の対象ではない。「不信感」をいだくのは、相手が人間だからである。各自はおたがいを「無関心」という態度によつて自然化しつくそうとした。しかし、しきれない部分があった。そこから人間が突出して、「無関心」の破棄をせまる。そこからとは、食事、労働条件、睡眠という生存の最後で最初の条件からということである。ここでのみ囚人は「人間」としてあらわれる」と、両者の微妙な差異を考察する。ここでいう「人間」が、たとえ奪い合う存在を意味するとしても、人間であることには違いない。

すべての出来事は、ただ私一人の出来事として、周囲の完全な無関心のなかで起り、そして終わった。またしても私は不用意に生きのびた。それが、その事件が私にたいしてもつことのできたすべての意味である。みずからの意志でみずからを決定するということをおよそそのときから私は断念した。（「オギータ」）

「みずからの意志でみずからを決定する」ことへの断念とは、つまり決定できるは

ずだという前提意識や根拠のない期待を持つことへの断念といえるだろう。そして、その断念を何度も繰り返さなければならぬところに、現実の苦がある。

ここにおいて、先の「人間を憎みながら、なおこれと強引にかかわって行こうとする意志」すら、その根拠を自ら担い得ることは否定される。こうした無責任性が人間を失語たらしめる。帰国後に石原が郷里で体験したことも、一人のことばを無化しようとする暴力的なたらきであったという点で、同一線上の出来事であるといえる。では、この失語からことばが回復することはなかったのかというと、収容所の監視兵に殺害されたある囚人の死に直面した時に、その契機がおとずれたと石原はいう。

監視兵のこの殺意は、あきらかに私の内部に反応をひきおこした。私は私の内部で、出口を求めていつせいにせめぎあう、言葉にならない言葉に不意につきとばされた。それはあきらかに言葉であった。（「沈黙と失語」）

それまで有機体として周囲の環境に適応していただけの生は、監視兵の殺意によつておびやかされることにより、一転して他者の承認を必要とする人間の生であったということが明らかにされる。純粹な有機体としての生は、それ自身のみで意味をもつことはない。意味は他者という概念を導入してもたらされるのであり、つまり他者から与えられる。意味は具体的なことばの形を取る以前に他者から与えられるのである。「言葉にならない言葉に不意につきとばされた」というのは、石原が、意味そのものを、激しい衝撃とともに目の前の他者から与えられた、ということにほかならない。

他者とは監視兵と死んだ囚人のどちらか一人を指すのではない。ひとりの囚人であった石原にとつて、その場の監視兵の殺意の対象が自分であったかもしれないという認識が起ころのは当然である。しかし、ある者が自分の代わりに死んだということ、つまり自分の代わりに殺されたということは、究極的には自分が殺したということにもなる。死んだ囚人も私だったかもしれないが、監視兵もまたこの私だったかもしれないのである。しかも現実には、そのどちらでもなかったという不可逆性がある。殺人という場面でしか人としての生死の意味を与えられなかったのは、石原にとつて悲劇であるが、今はそのようにして与えられた意味が、具体的な表現として、どのようなことばとなり得るのか、その可能性を追おう。

#### 第四節 告発とナルシズム―詩の源泉にあるもの―

不信は、その裏に信という関係をひそませている。例えば道端の小石に対して、私

たちは信や不信の表明をすることはしない。無関心な対象には信不信の関係は起らないし、それを問う意味はまずない。問うのは自他の存否をかける相手の場合であり、要するに死に直面した時である。不信によって行き着いた失語の状態は、死によって沈黙へと転換する。ことばが無意味から意味へと転換するその時に、一人の人間が最初に求め、かつ最後まで残したいという欲望にふさわしいそのことばは、名まえだろう。

私は、無名戦士という名称に、いきどおりに似た反撥をおぼえる。無名という名称がありうるはずはない。倒れた兵士の一人一人には、確かな名称があつたはずである。（「確認されない死のなかで」）

人の名という固有名詞はきわめて社会的なことばであり、その名づけにおいて既に何かしらの歴史的・社会的な制約が働いている。社会的な背景は情報であるが、その固有名詞の意味ではない。だが、むしろそうした社会的な背景を与えられるからこそ、人は名まえを欲することもある。石原が「一人の死者の名が記憶されなければならぬ」と述べるのも、そうした名まえのもつ社会性が理由だと考えられる。そして右のように憤りながら、石原もまたすべての死者の名を呼べるはずもない。まさしくそこに、彼が告発を自ら断念した理由の一つがあるだろう。

帰国後の被抑留者には、スターリンや旧ソ連への非難、日本政府に対する賠償請求等の告発を行う人々もいるが、彼は告発しないという自らの態度を表明していた。

告発しないという決意によって、詩に近づいたということですが、これも、今いった詩を選んだ動機に、ある意味ではつながると思います。（…）人間は告発することによって、自分の立場を最終的に救うことはできないというのが私の一貫した考え方です。（「沈黙するための言葉」）

石原によれば、囚人たちは収容所から解放される頃、「おなじ釜のめしを食った」ことを理由に「たがいに生命をおかしあつたという事実の確認を一拳に省略し」て、「不自然な寛容」でもって「一方的な被害者の集団」として連帯した（「強制された日常から」）。そして帰国後は死んだ同朋達への責任も不問に処した（名前を問わなかった）。この無責任な自己の不在性と死者の忘却は、石原にとって人間の在り方ではない。だがまた、この厳格さが彼のナルシズムの落とし穴にもなり得る。石原は自らを被害者とみなすことも他人を告発することもなかったが、告発する者を非難することもなかった。ここには実のところ、あらゆる他者の弱さは許せるが、自分の弱さだけは許せないという二重基準がはたらいている。告発しないという姿勢を自分自身にのみ求め、それを他の人々に問わないことは、一步誤ると、他人は関係ないけれ

ども自分だけは優れた在り方をしていたいという、自己愛的な優生思想になりかねない。

集団は、その成立の基盤に、内部対外部という対立を有している限り、最後は腐食し崩壊することをまぬがれない。そう考える石原を、吉本隆明は「国家とか社会とか、共同のものに対する防備が何にもない」と評した<sup>11)</sup>。しかし石原の立場からすれば、国家や社会どころか個人に対してすら防備したくなかつただろう。腐食と崩壊を避けようとするならば、その方法は対立しない、防備しないことである。しかしその方法を自己にのみ求めるならば、先のナルシズム的優生思想に陥る。

この詩によって何が書きたいかという立場をひっくり返して、この詩によって何が書きたくないかということを考えてみる必要があるか、ということですが、詩を書くことによつて、終局的にかくしぬこうとするもの、それが本当は詩にとつて一番大事なものではないか。あるいは告発しないという態度もそこにつながつていくかもしれません。（「沈黙するための言葉」）

被害者対加害者という告発を書きたいという欲望があつたとしても、その欲望に屈することは自分にはできない。全ての死者たちの名は書きたくても分らない。しかし何も書かずにいることもできないのである。たとえば冒頭の「位置」という詩は、「勇敢な男たち」への「君」という呼びかけの背後に、書きたくても書けない死者たちの名を込めて書かれた詩だろう。散文的な思考をする以前に、詩のことばによつて、石原は自らのナルシズムと倫理観とをせめぎあわせていたと考えられる。これはまた、ことばをつかい、詩を創る全てのものに関わる問題である。

今回の論文では、石原の詩が書かれた必然性を、その「内的な問い直し」である散文作品を通して明らかにしてきた。具体的な詩の分析は、結論部分で再び取り上げた「位置」をはじめ、今後行う課題である。

## 注

(1) 鶴見俊輔『戦時期日本の精神史』岩波書店、一九八二。

(2) ただし石原の詩をシベリア抑留とのみ関連して論じることは、松田幸雄「シベリヤの意味―石原吉郎論―」（『詩学』一九六四・四）など、早くから批判が出ている。

- (3) 石原の作品の引用は『石原吉郎全集』全三巻、花神社、一九七九—一九八〇による。
- (4) 内村剛介「抛るべきものは何もない」『現代詩手帖』一九七八・三。
- (5) 清水昶「サンチョパンサの帰郷」『石原吉郎詩集』現代詩文庫26、思潮社、一九六九（解説部分）。
- (6) 一九五九年十月二十九日付けで弟の石原健二へ送られた書簡が、一九六七年に作品として発表され、若干の訂正の後に刊行された。
- (7) 「詩の象徴性と生存感覚（断念）と（拒絶）の構造」（『現代詩読本2 石原吉郎』思潮社、一九七八、収録）。ただし思想を個人の体験へと還元するだけならば、単なる実感主義として同じ体験をし得ない他者の排除となる。
- (8) 今回は触れないが、石原はキルケゴールの「単独者」思想の影響を受けている。
- (9) 内村剛介「ロシヤへのたくまざる傾斜」『現代詩手帖』一九七八・六。
- (10) 芹沢俊介「単独者の自由とその限界」（前掲『現代詩読本2』収録）。
- (11) 鮎川信夫・吉本隆明「石原吉郎の死」『磁場』一九七八・春季。

# ISHIHARA Yoshiro' s Narcissism

: Origin of Poesy

OBAMA Seiko

abstract

After the defeat of Japan, ISHIHARA Yoshiro (1915-77) was detained for 8 years in Siberia, and returned by amnesty with the Stalin death in 1953. It is generally said that Ishihara's poesies treat the motif of experiences in Siberia. He had the theme that runs through on all his poesies. The theme is 'coexistence' or 'solitude'.

In the 1970's, he published his works not only by poetry but also in prose. Many prose works are reflection of memories in Siberian camp, incidents after his return to Japan, and comments on his works. He remarked "It takes about 15 years till I began to write in prose. For the period of such years, I have internalized my external experiences and established my subject that should deserve to ask. That is, I made trial and error". ('About "Nostalgia and Seas"')

The style and the matter are not separable but united elements. Poetry is extraordinary style of language. Prose is ordinary style. In Ishihara's works, how can we trace his experiences which unite those two styles? Can we find the origin of his poetic energy?

This paper reveals his narcissism as the creative energy for poesies.

Keywords : ISHIHARA Yoshiro, Narcissism, extra/ordinary language, Siberian detention